

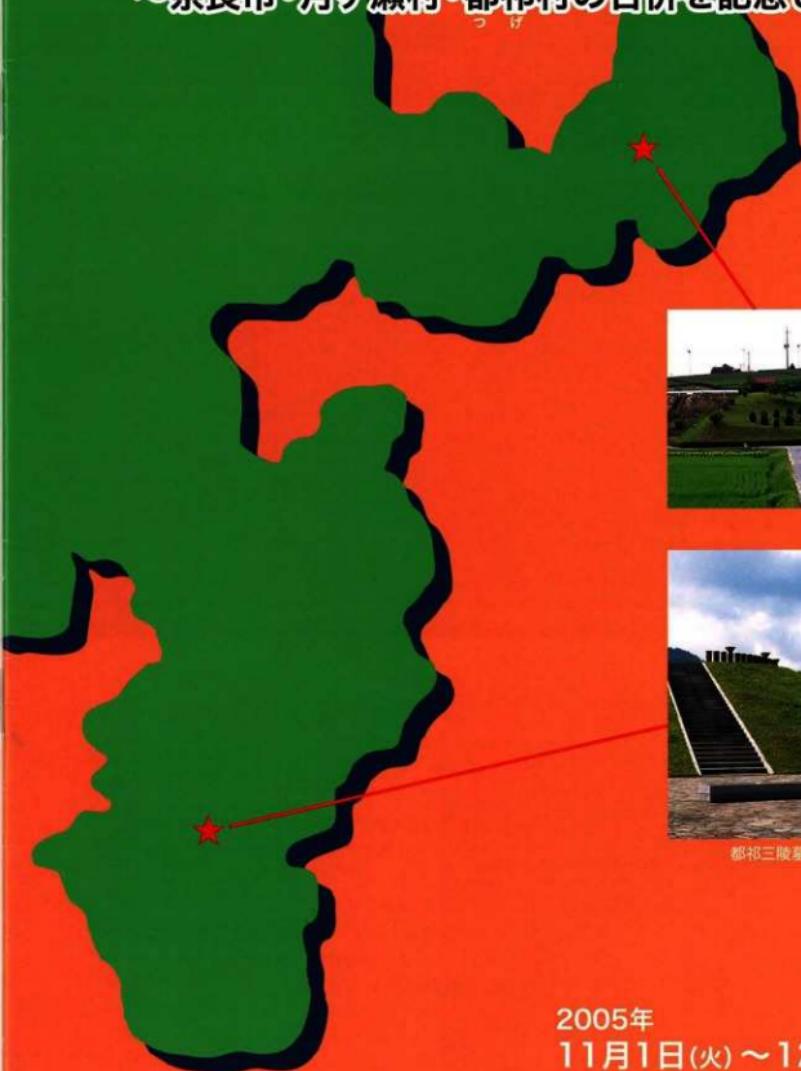
第23回平城京展

発掘調査からみた

奈良市東部の考古学

～奈良市・月ヶ瀬村・都祁村の合併を記念して～

つげ



開催にあたって

平成17(2005)年4月1日に、奈良市、月ヶ瀬村、
郡都村が合併することにより、奈良市の東部地域が
大きく広がりました。これにより、奈良市が扱う遺
跡の数や面積、また、発掘調査によって出土した遺
跡・遺構・遺物の数量も増加しました。

奈良市の東部地域は、中世より「東山内」(東山
中)と呼ばれ、「国中」と呼ばれる奈良盆地とは、
地理的にも、歴史的にも異なり、独自の文化を形成
してきました。合併に伴い、奈良市東部は、これまで
よりも深みのある歴史を考えることができますよう
になりました。

また、近年は、旧奈良市東部での発掘調査も多く
実施しております。それらの成果も含めて、発掘調
査で出土した奈良市東部の遺跡について、遺物やバ
ンルで紹介し、ご覧いただこうと思います。これら
を通して、文化財に対する理解が深まり、奈良市の
歴史の一端にふれていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の展覧会を開催するに
あたり、ご協力いただいた関係機関各位に心より感
謝申し上げます。

平成17年11月1日

奈良市教育委員会
教育長 中尾 勝二

例　言

- 1.この冊子は、平成17年11月1日から12月27日まで、
奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する第23回
平城京展「発掘調査からみた奈良市東部の考古
学」の解説パンフレットです。
- 2.奈良県立橿原考古学研究所および同附属博物館
には、出品の御協力をいただきました。本書に
収録した写真・図には、上記の機関から提供を
受けたものがあります。
- 3.本書の編集・レイアウトは、埋蔵文化財調査セ
ンター（一部社会教育課）職員の協力のもとに、
森下浩行がおこないました。

奈良市の東部地域は、大和高原の北西部にあたり、地形区分では山地に分類されます。植生や水室跡など、東部地域の特徴的な遺跡の存在は、山地という地形からみられるものです。

山頂や丘陵上などには古墳や中世の城郭が築かれますが、小河川に沿って、谷あいの地形が広がっており、集落遺跡などは、谷あいの平坦地（微高地）に分布します。



↑空からみた水間地域（北から）

中央の道路（国道369号線）の両側に水間遺跡が広がっています。この道を南にいくと、袖ノ川を通り、都祁に至ります。



←空からみた袖ノ川地域（東から）

狭い谷あいに袖ノ川イモタ遺跡はあります。

↓空からみた都祁南之庄地域

（北から、奈良県立橿原考古学研究所提供）

手前に三陵墓古墳群がみえていま
す。奥には都祁野岳、さらにもうには、
奈良市最高峰、貞ヶ平山がみえて
います。



また、奈良市の東部地域は、伊賀・伊勢地域を通じて、東海や近江地域とつながっています。奈良盆地から東へと向かう交通路となっていたものと思われます。特に平坦地の多い都祁地域は、奈良時代に伊賀、伊勢とを結ぶ「都祁山之道」が開かれています。このように交通を考える上で、歴史的に重要であったこともこの地域の特徴です。

東部地域の歴史は、縄文時代

草創期から始まります。奈良市域では、草創期の遺跡はみつかっていませんが、布目川流域の山添村桐山和田遺跡などでみつかっています。

つづく早期の遺跡は、奈良市域でもみられ、榎ノ川イモタ遺跡、別所下ノ前遺跡、水間遺跡などがあります。早期の遺跡は、この地域に多数存在し、近畿でも有数の密集地となっています。

前期の遺跡は少ないですが、中期では水間遺跡、榎ノ川イモタ遺跡、後・晚期では大柳生ツクダ遺跡などがあります。



↑榎ノ川イモタ遺跡出土の縄文土器

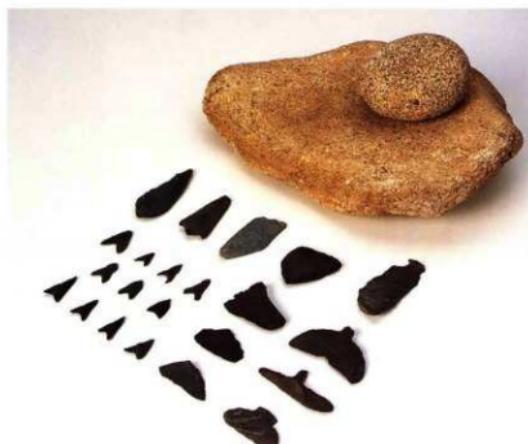
船元式と呼ばれる縄文時代中期前葉の鉢です。

船元式土器は、岡山県倉敷市に所在する船元貝塚から出土した資料を標式にしており、中部瀬戸内地方を中心に広がっています。



↓水間遺跡出土の石器

狩猟のための道具(石鏃、尖頭器、有茎尖頭器)、物を切ったり、皮をなめす道具(削器、石匙)、木の実などを潰したりする道具(磨石、石皿、凹石)があります。種類は豊富です。また、多くは二上山産とみられるサヌカイト製ですが、水晶製やチャート製のものもあります。



↑榎ノ川イモタ遺跡出土の縄文土器

縄文時代早期前半の大川式の深鉢です。

大川式土器は、山添村の大川遺跡で見つかった土器です。その特徴は、尖底の深鉢に、刻みを入れた棒状工具を回転させて文様を付けることです。この文様を押型文と呼んでいます。押型文のある土器は、このほかにも別所下ノ前遺跡から黄島式土器が出土しています。

弥生時代の東部地域

は、都祁地域が中心になります。都祁東山遺跡では、前期から中期頃の土坑がみつかっています。都祁ゼニヤクボ遺跡では、前期の土器はあるものの、遺構がみつかっていません。しかし、中期や後期～古墳時代初頭では、多くの建物や土坑とともに土器や石器がみつかっています。また、都祁ゼニヤクボ遺跡や都祁白石遺跡では、中期の方形周溝墓もみつかっています。そのほかには、後期～古墳時代初頭の集落跡が水間遺跡でみつかっています。



↑都祁ゼニヤクボ遺跡（第1次調査）
の集落跡（西から、奈良県立橿原考古
学研究所提供）

弥生時代中期と後期から古墳時代初頭の集落跡です。建物の多くが竪穴式であり、後期の平面方形の建物では、一辺が8mくらいのものから3mくらいのものまであります。

多くの土器のほか、鐵鎌、石鎌、
新鍊車、石包丁（稻穂を摘む道具）、
砥石が出土しています。



都祁ゼニヤクボ遺跡（第1・2次
調査）の建物跡↑→

（奈良県立橿原考古学研究所提供）

上の写真は中期の建物（竪穴住居）跡で、右の写真は後期から古墳時代初頭の建物（竪穴住居）跡です。中期の建物は、平面が円形ですが、後期から古墳時代初頭の建物は、平面が方形です。中・後期の建物どちらにも中央には、炉の跡がみられます。



**都祁東山遺跡の土坑→
(南西から)**

浅い土坑で、深さ20cmほど残っていました。堅穴式の建物（堅穴住居）跡の可能性もあります。弥生時代前期末～中期初頭の土器と石器が出土しています。



←都祁ゼニヤクボ遺跡（第4次調査）

の方形周溝墓（南から）

方形周溝墓の周溝の一部です。この方形周溝墓は、ほぼ全形のわかる数少ない例ですが、埋葬施設はみつかっていません。

周溝を含めて東西12m、南北16mの大きさです。周溝の幅は、広いところで2m、隅の部分では1mに満たないところがあります。周溝から弥生時代中期の土器と石器が出土しました。

↓都祁ゼニヤクボ遺跡（第5次調査）出土の弥生土器

方形周溝墓の周溝から出土した弥生時代中期の壺です。波状文や直線文などで装飾されており、口縁部の内側に貼り付けられた棒状の浮文は、近江や東海地域などの影響を考えさせるものです。

方形周溝墓は、弥生時代に特徴的な墓の形態で、木棺などの埋葬施設の周りに溝を平面方形に掘り、埋葬施設を周囲から区画します。周溝には、一部が途切れるものもあり、途切れた部分が埋葬施設への陸橋（通路）となっている場合もあります。

東部地域では、都祁ゼニヤクボ遺跡や都祁白石遺跡でいくつかみつかっていますが、全体のわかるものはわずかで、埋葬施設はまだみつかっていません。



古墳

時代の東部地域は、前期の古墳が発見されておらず、前期の集落も中期にくらべて多くありません。前期の古墳文化は、あまり活気のあるものではありません。

ところが、中期になりますと、前方後円墳（都祁三陵墓東古墳）が出現し、中小の多くの古墳が造られるようになります。集落も後期まで続く遺跡がみられます。また、この頃から祭祀遺跡もみられるようになります。



↑水間遺跡の湧水施設跡

石見型木製品と須恵器の高杯などが出土しました。石見型木製品は権力者が儀式に使用した杖を模したともいわれており、それを堰板に利用したと考えられます。

←阪原阪戸遺跡の石組橋

(奈良県立橿原考古学研究所提供)

湧水は、溝、木桶によって、石組橋へ導かれます。橋内には、砂と川原石が入っており、水をきれいにするろ過の機能がみられます。



↓大柳生宮ノ前遺跡の導水施設跡

(奈良県立橿原考古学研究所提供)

小河川の中洲に導水施設があります。堰板から溢れ出た清らかな水は、木桶を通して、その中央の深い削込部に一時的に溜まります。



水の祭り

が行われたとみられる
遺跡が3箇所あります。水間遺跡、阪
原阪戸遺跡、大柳生宮ノ前遺跡です。
いずれも谷あいに向かう丘陵斜面に
つくられ、湧水点や導水施設がみつ
かりました。

東部地域では、古墳時代中期より、
小地域ごとにこうした祭祀場を設け
たものと思われます。

また、3箇所とも奈良・平安時代に
も続けて祭りを行っています。

中期古墳の時代になりますと、都祁地域を中心古墳の築造が盛んになります。

なかでも都祁三陵墓古墳群が卓越しており、前方後円墳や大型の円墳があります。権力のある豪族が都祁の地域に生まれたのでしょう。

また、中小の古墳は、小地域ごとにみられます。大柳生森本古墳や、水間遺跡で2基、横田矢田野遺跡で4基がみつかっています。方墳が多いのが特徴です。



←整備後の都祁三陵墓西古墳
(北から)

直径40mの大型円墳です。周濠や段はありませんでしたが、墳丘の頂には円筒埴輪列、頂と斜面には、葺石がありました。

整備後の都祁三陵墓東古墳→

(西から)

全長110mの前方後円墳です。後円部は3段に造られ、それぞれの段に埴輪列がみられます。また、墳丘斜面には葺石があります。



←都祁三陵墓西古墳の埋葬施設

(北から、奈良県立橿原考古学研究所提供)

割竹形木棺と箱形木棺の2つの埋葬施設が並んでみつかりました。割竹形木棺は、最初の埋葬施設であり、墳丘の中心にあり、規模も大きく、粘土で被われていました。箱形木棺は後から葬られました。副葬品には、玉や櫛などの装身具、鉄剣・鉄鎌などの武器、鎌・鑿などの農工具があります。鉄製品が多いことが特徴です。



↑水間1号墳の周溝から出土した土器

須恵器2点と土師器2点が出土しました。1号墳は、一辺約7mの方墳で、周溝が残っていました。埋葬施設は、2号墳と同様の割竹形木棺でした。

←水間2号墳の埋葬施設（東から）

丸太を削り貫いて作った割竹形木棺を埋納した墓穴が残っていましたが、墳丘は残っていませんでした。棺の中には、鉄剣、鉄鎌、鉄斧などの鉄製武器や農工具が副葬されていました。



↓都祁中荻遺跡の建物（竪穴住居）跡

(南東から、奈良県立橿原考古学研究所提供)

平面が方形の建物（竪穴住居）です。建物の北辺には、窓の跡がみられます。後期。



古墳時代の集落をみると、

前期は、大柳生中殿東遺跡などで小規模なものがみられますが、多くありません。

中期になりますと、遺跡の数も増え、また、大規模な集落があらわれます。都祁中荻遺跡、横田矢田野遺跡、名荷遺跡、都祁白石遺跡などです。こうした集落の多くは、後期まで続きます。

後期古墳の時代になりますと、東部地域には、前方後円墳や大型の円墳はなくなり、小規模な古墳（円墳）を一定の区画に集めて築造する群集墳の時代になります。特に都督や大柳生の地域では、たくさんの群集墳がみられます。

埋葬施設は、中期にみられたような木棺を埋めたものも残りますが、しだいに横穴式石室へとかわっていきます。



↑北村富山4号墳の埋葬施設（北から）

木棺を墳丘頂部に直接埋葬していました。棺内からは管玉と筋錐車が、棺外の小口からは須恵器と土師器がまとまって出土しました。6世紀前半。



↑大柳生水木古墳の墳丘と石積

（東から、奈良県立橿原考古学研究所提供）
墳丘の裾に沿って石積がみられます。この石積は、墳丘の内外を区画し、盛土が崩れないないようにと築かれています。また、その外側には、3つの穴が並んでみつかりました（写真中央付近）。おそらく、儀礼か祭祀の際に木柱を立てたものと思われます。6世紀後半。

↓都督シントク1号墳の埋葬施設

（東から、奈良県立橿原考古学研究所提供）
横穴式石室内に箱式石棺がありました。横穴式石室は、入口を開閉することができるなので、後からも埋葬すること（追葬）が容易になりました。石棺だけでなく、木棺も埋葬していた可能性もあります。6世紀末。





↑北村宮山4号墳出土の土師器・須恵器

墳丘の盛土や表土からも須恵器が出土しました。埋葬する前にもあるいは後にも、墳丘の上で儀礼か祭祀が行われたものと思われます。



↑大柳生競馬道1号墳の横穴式石室（南から）

入口から玄室の奥壁をみたところです。発掘調査は行われていませんが、石室の石材や積み方からみて、東部地域では今のところ、最古と考えられる横穴式石室です。宮山4号墳とあまりかわらない時期に築造されたものと思われます。

奈良市域の盆地部ではあまりみられない横穴式石室の古墳が多いのも東部地域の特徴です。

↓都祁シントク1号墳出土の須恵器

(奈良県立橿原考古学研究所提供)

器体が球形で、フラスコ形長頸瓶と呼ばれています。東海地方で焼かれたものと思われます。石室の入口を閉める際にほかの土器と一緒に儀礼に使われたようです。東海地方との交流がわかる遺物です。



↓大柳生ヲショヨジ1号墳（南から）

飛鳥時代（7世紀）の小方墳です。追葬も不可能と思われる非常に小さな石室です。東部地域では今のところ、最も新しいと考えられる横穴式石室です。

なお、飛鳥時代の集落跡などは、同じ大柳生の水木遺跡や水間遺跡でみつかっています。

奈良・平安時代(古代) の東部地域の特徴は、柵と水室の存在です。

柵に関連するとみられる遺跡は、水間遺跡、月ヶ瀬尾山代遺跡のほか、山添村大西塚ノ本遺跡があります。水室跡は、都祁吐山トノニシ遺跡、都祁ゼニヤクボ遺跡でみつかっています。

また、この地域は、奈良時代の火葬墓・藏骨器が多くみられ、墓誌が出土したものには、田原の太安萬侶墓、都祁の小治田安萬侶墓があります。



↑水間遺跡出土の掘立柱建物跡(南東から)

総柱建物が4棟あります。うち、3棟は南北方向に並び建っています。

←水間遺跡出土の建物跡(西から)

平面方形の竪穴式です。東辺に土器を利用した窓がみられます。東西1.9m、南北2.5mで、一般的な住居としては小さく、煮炊き専用の建物とみられます。

↓発掘された月ヶ瀬尾山代遺跡

(南から、奈良県立橿原考古学研究所提供)

柵では、鉄製品の製作も行われていました。尾山代遺跡は、その作業が行われていたと思われる遺物（ふいごの羽口や鉄滓など）が出土しています。

現在は、奈良県が史跡に指定し、整備した公園になっています。

柵では、山林の木材を伐採し、加工して、平城宮や寺院へ搬出する仕事をしていました。

水間遺跡で出土した多量の木屑（木斧の削り屑）や木製品の未製品は、木材生産・加工が行われていた証拠です。

また、柵には、役所（山作所）が置かれており、水間遺跡で見つかった掘立柱建物群は、役所に関連した施設である可能性があります。



平城京の葬地は、当時の墓の分布からみて、京の北、西、東の三方の丘陵や山地、南方の河川敷などに設けられていたようです。東方の葬地が奈良市東部地域に当たります。この地域は、田原の太安萬侶墓、都祁の小治田安萬侶墓の存在からみて、平城京の官人の葬地であったと考えられています。



↑太安萬侶墓の墓坑と木櫃

(南から、奈良県立橿原考古学研究所提供)

火葬骨を納めた木櫃を安置した後、湿気を避けるための木炭で全面を覆っています。

現在は、国の史跡に指定され、整備を行い、公園になっています。



←太安萬侶墓の墓誌

(国(文化庁)保管、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館提供)

木櫃の下から出土しました。青銅製の短冊形で、銘文から平城京の左京四条四坊（現在のJR奈良駅の西側あたり）に住んでいたことがわかります。

↓都祁吐山トノニシ遺跡出土の氷室跡（北から）

直径約5m、深さ3mの壠形の土坑（穴）は、氷室跡とみられます。底には直径90cm程の小穴があります。



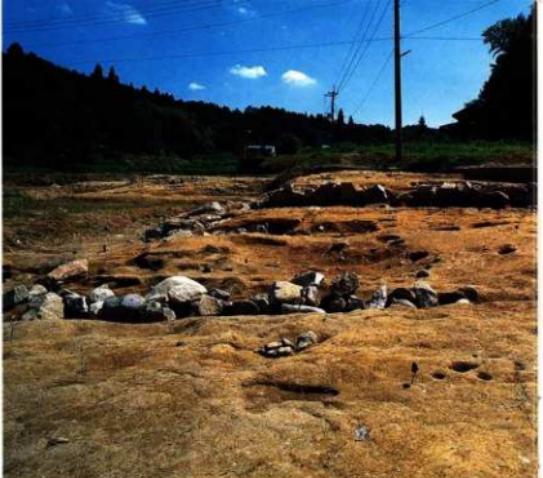
氷室は、氷を夏まで貯蔵しておくための施設です。都祁の氷室についての古い記載は、「日本書紀」にみることができます。氷室の形態や用途がわかります。また、平安時代の「延喜式」には、大和の氷室は、都祁に1箇所あることが記されています。

平城京の発掘調査では、長屋王邸跡で、都祁の氷室に関わる木簡が出土しています。

中世 (平安末・鎌倉・室町時代)

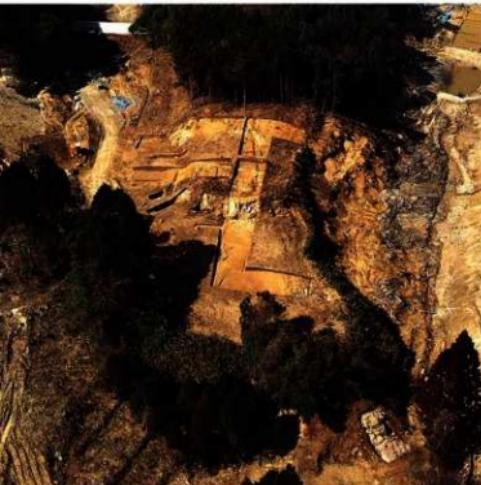
の東部地域は、「東山内」と呼ばれています。時代が戦乱の世であることを映しだすように、高所には、城郭跡がみつかっており、また平坦地（微高地）や低い丘陵上には、集落跡や屋敷跡がみつかっています。当時の文献などからみて、集落跡や屋敷跡のなかには、莊園関係の遺跡も含まれているものと思われます。

また、藤尾城跡や水間遺跡の丘陵上には、当時の墓とみられる遺構がみつかっています。



↑別所辻堂遺跡の屋敷を区画する石垣（北から）

室町時代の石垣2列がほぼ平行してみつかりました。屋敷地を2段に造成しています。下壇の石垣は、屋敷地を区画するものと思われます。



←空からみた藤尾城跡（南東から）

尾根を利用して戦国時代の城郭が築かれています。5つの曲輪が1列に並ぶことから、たくさんの兵を収容することが可能な軍事的性格の強い城郭と考えられています。

↓藤尾城跡の土壘と堀（南西から）

曲輪の南側を防御する施設です。堀の断面はV字形で、土壘上面からの深さは、最大で3.4mありました。土壘の上にはさらに盛土があったものと思われます。



中世の城郭は、自然の山を利用してしで、有力者たちが自分の土地を守るために防衛の拠点として築きました。

東部地域にある城郭の数は約40城を数えますが、発掘調査したものは、月ヶ瀬の石打城、狭川の藤尾城、都祁の小山城のみです。

石打城や藤尾城が高所にあるのに対して、小山戸城は丘陵端の比較的低いところにあります。小山戸城は、もともと有力者の屋敷地であったところを戦乱にあわせて、城に改変したようです。

中世の集落や屋敷跡などは、
谷あいの平坦地（微高地）でみられます。
若荷遺跡や別所下ノ前遺跡では、
掘立柱建物跡がみつかっています。
水間遺跡や別所辻堂遺跡では、屋敷地を
区画する溝や石垣がみつかっています。
阪原門前遺跡では、埋められた谷や井戸跡がみつかっており、近くに屋敷や
寺院が想定されます。

また、水間遺跡では、祭祀跡かとも
みられる石積遺構がみつかっています。



↑水間遺跡の祭祀跡とみられる遺構（東から）

小さな谷あいから石積の遺構がみつかりました。
石は乱雑に積み上げられており、周囲からは平安
時代末の多くの瓦器碗がまとまって出土しました。
墓である可能性もあります。

←水間遺跡の墓とみられる石積（北から）

火葬骨をおさめたとみられる石積遺構8基（鎌倉
時代～室町時代）の内のひとつです。藏骨器は残
っていましたが、骨を入れた有機質の袋か
容器のまわりに石を積んで埋めたものと思われます。
積石には、火を受けた痕跡がみられます。

↓藤尾城跡南西でみつかった土坑墓（西から）

丘陵上で1基のみがみつかりました（写真中央のく
ぼみ）。棺を用いずにそのまま埋葬したようです。
平安時代末の瓦器碗1個と中国産の白磁碗2個、鉄製
の小刀1本を副葬していました。



中世の埋葬方法には、火葬と土葬があります。

火葬は、奈良に付された骨を拾い、
藏骨器におさめて埋葬するのが一般的
です。

土葬は、棺を使用した場合とそのま
ま埋葬した場合とがあります。棺を用
いずに、そのまま埋葬したものを土坑墓
といいます。

丘の上に数百もの集団墓地をつくる
こともあります。奈良市東部地域で
は、みつかっていません。



平城京（復原模型）

第23回平城京展
発掘調査からみた奈良市東部の考古学
～奈良市・月ヶ瀬村・都祁村の合併を記念して～
平成17年11月1日 発行
編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
発行 奈良市教育委員会